

書写のイメージを変えよう 4

山梨大学教授

宮澤

正明

前回は、速書きとしての「いわゆる許容の書き方」について具体例をあげて述べました。

順番からいえば、いよいよここで「行書の書き方」が登場するのですが、その前に、速く書くことの学習への動機づけや目的意識、目標設定などについて考えておきたいと思います。というのも、速書きとしての行書学習が、単に書体としての行書の特徴を知り、行書の課題文字を書き写す活動で終わってしまい、日常生活の筆写に直接結びついていないように思われるからです。

生徒が速書きの必要性を強く感じ、行書学習の目的を明確にするにはどうしたらよいのでしょうか。

今回は文字を書く場面をいくつか想定し、その中で速書きの必要性を考える糸口にしたいと思います。

文字を書く場面とその方法

私たちが文字を書く場面は、どのような状況が考えられるでしょうか。また、それらの状況において速書きと

の関係はどのようになっているのでしょうか。

普通、次のような状況、そして速書きとの関係が考えられます。

原稿を見ながら書く（視写）

既に完成原稿があり、それを写し取る場面です。本に書かれている文・文章を抜き書きする、下書き原稿を清書する、板書の文字をノートに書き写すなどの場面がこれにあたります。これらの場合は、書き写す原稿があるので、書字速度はそれほど必要としないでしょう。ただ、板書のように、目の前で書かれる内容を書き写す場面ではその速度は当然速まることとなります。このような場面を想定した学習として、「視写」と呼ばれる方法が学校教育では行われず。

人の話を聞きながら書く（聴写）

人の話を聞いてそれを文字化する場面で、いわゆる聴写です。社会生活では、会話による取材や、会議・講義・

講演などで必要が生じます。しかし、これは至難の技です。録音した後、時間をかけて文字起こしをする方法がとられたり、特殊な記号による「速記」が生まれたりしたことを考えれば、その難しさがわかります。

日常行われる聴写は、話される内容を要約するか、自分なりにキーワードを見つけないが書くことが多いと思います。ですが、それにしても音声言語を文字言語に置き換える作業ですから書字速度はいやが上にも高まります。しかも、話の展開の理解はもちろんのこと、語彙量、漢字の知識、言語感覚などが要求されることから、文字を速く書く能力とともに、思考力、判断力、豊富な知識などが聴写力を支えることとなります。

考えながら書く

日記、手紙、はがき、報告書を書くなど、日常生活において文字を書く活動の多くは自分の考えを書く場面がほとんどといえます。学校生活であれば、作文やテストの答案を書くなどがその代表例です。日記や覚え書きのよつなものは自己の記録ですから、書字速度や文字の巧拙はあまり問われませんが、手紙、作文、答案などは他者に読まれることを前提にしていますから字形を整え、読みやすく書くことが要求されます。また、時間も制限さ

れる状況が多いので、速書きの要求度は高くなります。

以上、私たちが文字を書く場面を、見ながら書く、聞きながら書く、考えながら書くの三種類に分けてみました。中学校国語科書写の行書学習を日常に生かすためには、これらの場面を想定して速書きの必要性を考え、それぞれの場面を実際に体験しながら速書きの方法を習得することが行書学習を意味あるものにすると考えます。

なお、筆者の担当する科目の受講生を対象にノートの取り方を調査したところ、ノートの取り方は、板書内容の一部分、板書内容のみ、板書内容＋講義内容の要約

板書内容＋詳しい講義内容の四つのグループに分けられました。最終講義終了後、試験を実施しノートの取り方と試験結果との関係を調べたところ、板書内容＋講義内容の要約の方法をとっている学生の成績が圧倒的に上位を占めました。板書だけでなく、講義内容の要点をしっかり受け止め、素早くメモを取ることが大切のようです。また、のノートに書かれた文字は、他のグループのノートに比べて配列・配置がよく、読みやすいものでした。この調査結果は、行書学習では、行書の書き方に終始するのではなく、行書を用いる場面、活用方法にまで及んで進めることがいかに重要であることを教えてくれています。